

SAGAMI WOMEN'S UNIVERSITY

学園ニュース

2020.10.18
vol.165

大学院
(男女共学)

大 学

短期大学部

高等部

中学部

小学部
(男女共学)

幼稚部
(認定こども園・男女共学)

120th
Anniversary



Sagami Women's University

— 創立120周年特別号 —

見つめる人になる。見つける人になる。



相模女子大学



佐々木 勝洋
学校法人 相模女子大学
理事長

わが学園は、本年10月、創立120周年を迎えました。

相模女子大学の前身である帝国女子専門学校は、かつて東京の大塚にあって、「帝専」の略称で全国に知られ、留学生も多く在学しておりましたが、不運にも1945年4月の空襲で、校舎はじめ一切を焼失し、新天地を求めて相模原の現在地に移転してまいりましてから、今日の伸張を見るまでになりました。その裏には、教職員、学生、同窓会、保護者等のほか関係者の、それこそ血の滲むような努力、献身があつたことを承知しております。すなわち私立学校は、そうした篤志に支えられてあるもので、そのように運営されてこそ、私立学校はそれぞれの独自な色を競い合うことにもなります。

2014年4月、創立110周年に制定した「見つめる人になる。見つけられる人になる。」を教育スローガンに掲げて新しい教育構想（Sagami Vision 2020—総合学園としての約束—）を学内外に宣言いたしました。「見つめる人になる。見つける人になる。」とは、社会との関わりの中で積み重ねるすべての経験を通して、社会と自分自身をしつかり「見つめ」、社会のあるべき姿を摸索し自らの進む道を「見つける」。そして、社会の一員として、社会の恩恵を感じながら生きるとともに積極的に社会に貢献する「人」を育てるということです。そこに、本学園が創立以来継承してきた、自立した女性を育成する「女子教育」の今日的な意味があります。創立120周年を期し、本学が果たしてきた社会的な役割を学園の全教員・職員はもちろん、学生や卒業生とともに再認識し、保護者と地域の方々のご支援に力を得て、さらなる発展に邁進します。



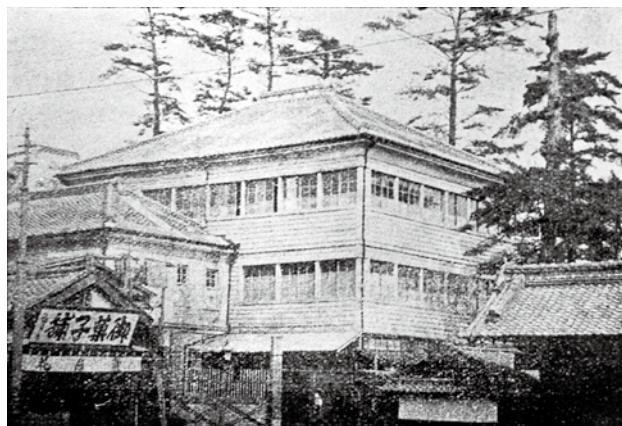
学校法人の沿革（概要）

大学・短期大学部の歴史

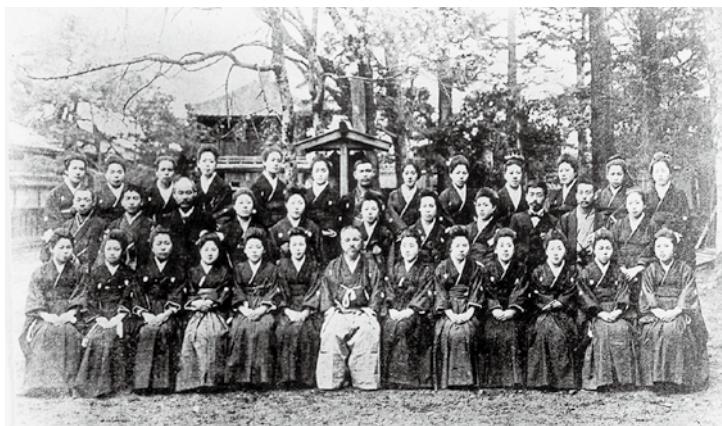
1900（明治33）年9月、本学の創立者・西澤之助によつて東京市本郷区龍岡町（現・東京都文京区湯島）に日本女学校が開設され、翌月の10月18日に開校しました。今日の相模女子大学はここに由来し、以来、10月18日を創立記念日と定めています。日本女学校は開校時に、多くの入学者を迎へ、創立2年度以降さらに増加しました。生徒は東京市内、近県の実業家をはじめとする名流の子女が多く、名門女学校としてその名が広く知られました。

1909（明治42）年、西は帝国女子専門学校を東京市小石川区大塚町（現・文京区大塚付近）に開設し、女子の高等教育機関として日本で4番目に「専門学校令」の適用をうけました。

1919（大正8）年4月、家政学の先駆者として高い評価を受けていた野口保興が帝国女子専門学校の副校長に就任。マーガレットの花を八咫の鏡が咲んでいる校章は野口保興が考案しました。帝国女子専門学校は、昭和の時代に入ると、北海道から沖縄まで全国から志願者を集め、「帝専」の略称で広く親しまれました。1944（昭和19）年頃になると、太平洋戦争激化に伴い、多くの学生が各地の軍需工場に動員されました。1945（昭和20）年4月13日夜半から14日未明の米軍の空襲によって、大塚校舎と7学寮のほぼ全部を焼失し、寮母1名と寮生3名が命を失いました。終戦後の1946（昭和21）年、帝国女子専門学校は神奈川県相模原の現在地、旧陸軍通信学校の跡地に移転し、再び開校しました。1949（昭和24）年に新教育制度による相模女子大学として再発足し、1951（昭和26）年短期大学部を開設、1964（昭和39）年に、これまで木造校舎しかなかつた学園に、鉄筋教室の大塚校舎1号館が竣工しました。今では、4学部10学科の総合大学として、多くの学生が学んでいます。



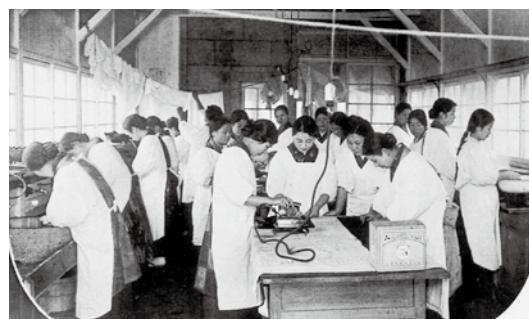
1900（明治33）年 日本女学校校舎



1902（明治35）年 日本女学校技芸科第1回卒業生



1921（大正10）年 大塚校舎正門



1933（昭和8）年 実習（洗濯）



1944（昭和19）年頃 防空服装



1933（昭和8）年頃 帰省準備中の寮生



1939（昭和14）年 大塚校舎全景



1944（昭和 19）年頃 勤労動員



1949（昭和 24）年頃 相模原校地全景



1946（昭和 21）年 帝国女子専門学校復興祭



1955（昭和 30）年 洗濯風景



1961（昭和 36）年 学寮



1962（昭和 37）年 米軍来校



1964（昭和 39）年 1号館竣工



1967（昭和 42）年 ダンスパーティー



1968（昭和 43）年 学園の民主化を求めて



1972（昭和 47）年 相模大野駅

中学部・高等部の歴史

相模女子大学中学部・高等部の歩みは、1915（大正4）年設立「静修実科女学校」に遡ります。1922（大正11）年に「静修女学校」、1936（昭和11）年に「静修高等家政女学校」、1942（昭和17）年に「日本高等家政女学校」、1945（昭和20）年に「静修女子商業学校」と校名変更や改組を経たのち、学制改革を受け、1948（昭和23）年に「静修女子高等学校」となりました。その後、1949（昭和24）年に「静修女子高等学校」に併設する形で「静修女子中学校」を開校。当時の校舎は、大学の旧国文科木造2階建ての一隅を使用しました。

1950（昭和25）年には、校名を「相模女子大学中学校」「相模女子大学高等学校」とし、翌、1951（昭和26）年に現在の校名である「相模女子大学中学部」「相模女子大学高等部」に変更しました。



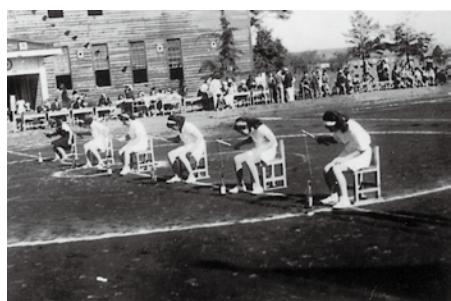
1948（昭和23）年 1期生入学記念



1948（昭和23）年 中高合同校舎



1950（昭和25）年 体操着



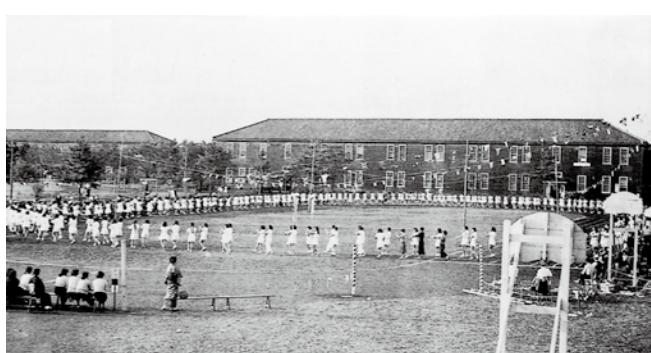
1951（昭和26）年 秋の運動会



1951（昭和26）年 生徒総会



1951（昭和26）年 国語科授業風景



1955（昭和30）年頃 運動会



1956（昭和31）年 夏の制服



1959（昭和 24）年 卒業記念（相模大野駅改札前広場）



1960（昭和 35）年 洋舞部



1964（昭和 39）年 高等部旧校舎



1970（昭和 45）年 第一グランド



1971（昭和 46）年 小中プール



1970（昭和 45）年 正面から見た校舎



1971（昭和 46）年 校舎の前で授業



1957（昭和 32）年頃 移転後の校舎での生徒たち

小学部の歴史

小学部は、1951（昭和26）年4月に開校しました。当時の教員は3名、新入生は1学年13名でした。相模女子大学は、幼稚部から大学までが揃い、総合学園として新しい出発となりました。校舎は、旧陸軍通信学校の木造兵舎を使用、広大な敷地の中に森林が残り、自然環境に恵まれた学校でした。

1969（昭和44）年には、第1回持久走大会が開催されました。また、学校全体を展示会場として児童の作品を公開する造形展が、1978（昭和53）年に始まり、どちらも小学部の伝統的な恒例行事として、現在も引き継がれています。



1951（昭和26）年 向ヶ丘遊園遠足（秋）



1951（昭和26）年 運動会



1953（昭和28）年 小中合同運動会



1953（昭和28）年 ひなまつり



1953（昭和28）年 遠足（箱根強羅）



1963（昭和38）年
鼓笛隊市中パレード



1969（昭和44）年
持久走大会



1987（昭和62）年 七夕集会



1990（平成2）年 造形展



1995（平成7）年
総合科学習（山羊の飼育）

幼稚部の歴史



1950（昭和 25）年 第1回入園式



1950（昭和 25）年 第1回運動会



1955（昭和 30）年 虫歯予防



1957（昭和 32）年 第8回入園式

1977（昭和 52）年
相生祭合同音楽会

1979（昭和 54）年 運動会

1950（昭和 25）年に相模女子大学幼稚園が開設されました。相模原町大野村（当時）の中で幼児教育の期待を担い、15名の新入園児を迎えるました。当時、保育園としては幼児預かり所のような施設がありましたが、幼稚園の開設は相模原町で第1号でした。帝國女子専門学校の育児科の学生が、新しく新設する幼稚園の園児の募集に尽力しました。

1951（昭和 26）年に相模女子大学幼稚部と名称を改めました。開設当初は、4歳児1クラス、5歳児1クラスでしたが、1953（昭和 28）年より3歳児クラスが始まりました。

1953（昭和 28）年、幼稚部から大学までの全生徒が参加する大運動会が開催、1978（昭和 53）年に園舎が完成し、2016（平成 28）年、認定こども園相模女子大学幼稚部に移行しました。



1950（昭和 25）年 クリスマス会



1953（昭和 28）年 大運動会

1957（昭和 32）年
ブランコで遊ぶ子ども

1957（昭和 32）年 お弁当



1983（昭和 58）年 納涼祭

相模女子大学の今

2010年の創立110周年時に定めたスローガン「見つめる人になる。見つけ
る人になる。」の下、しなやかな発想力と豊かな包容力を身につけ、地域社会を
担つていける人を育てるため、幼稚部から大学院までが一つのキャンパスに
ある総合学園として、各部で特色ある教育を開展しています。

大学・大学院・短期大学部

社会に貢献できる女性の育成

相模女子大学が育成するのは、地域や
社会の未来を女性ならではの着眼点で
発想できる「発想女子」です。主体的に学
ぶことで発想力を養い、キャリアを形成
していく。生涯にわたって自分を支
えることができる教養を身に付け、今
日本に求められる「社会に貢献できる女
性」を目指します。



〈社会貢献活動〉福島県本宮市
2008年に農林水産省が募集する
「田舎で働き隊！」に本学が女子大学と

相模女子大学が育成するのは、地域や
社会の未来を女性ならではの着眼点で
発想できる「発想女子」です。主体的に学
ぶことで発想力を養い、キャリアを形成
していく。生涯にわたって自分を支
えることができる教養を身に付け、今
日本に求められる「社会に貢献できる女
性」を目指します。
2018年に開設された「夢をかなえる
センター」では、学園での連携をはじめ、地
域や企業との協働などにより、それぞれの
活動の目的を設定し、課題解決に取り組む
学生を支援しています。

（社会貢献活動） 株式会社東京ポンパドゥル

株式会社東京ポンパドゥルと本学は、
2015年より、学生が考案したレシピ
をオリジナルパンとして商品化するコ
ラボレーション企画を行っています。こ
れまでに販売されたパンは10種類を超
え、毎年、11月の相生祭や都内店舗にて
人気商品の1つとして注目されます。コ
ロナ禍の2020年度においても、自宅
でできる社会貢献活動として多くの学
生が取り組み、44件の応募の中から3品
の商品化が決定しました。

して全国で初めて参加したことをきっかけに、本宮市と本学は、本宮市の本学専用農園「マーガレットファーム」での農作業体験や首都圏での物産展開催等を通じ、地域の活性化を目指して10年以上共に取り組みを行っています。有志学生による「もとみやS.M.I.L.E.プロジェクト」では、特産品を使用したメニューの開発やカフェの開催により、本宮市を多くの人々に知つてもらおうとその魅力を発信しています。



プログラミング教育
子どもたちの未来に役立つ教育、社会
がいかに変化しようとも対応できる人
材の育成を目的としたプログラミング
教育。単にロボットを動かすだけではなく、課題へどう取り組み、行動するか、その
ような思考の育成が主眼です。生徒たちはもてる力と知識を総動員し、独自の
やり方でゴールをめざします。



中学部・高等部

私は進む、夢に、未来に、私らしく

中学部・高等部は、一人ひとりの成長
に伴走しながら、新たな視点で眞の教育
を追求します。柔軟に思考し、探求し、創
造する力。自分を信じ、夢をみつけ、粘り
強く叶えていく意志。そのような「未来
に生きる力」を「マーガレットタイム」
の活動を通じ、豊かに伸ばしていきます。

「グローバル教育」「プログラミング」等の活動を通じ、豊かに伸ばしていきます。

自己の言葉で世界とコミュニケーションできるよう、充実した英語の授業の他、ネイティブ教員との日々のコミュニケーションや海外での語学研修など、生きた英語にふれる機会がたくさんあります。多彩なプログラムを通して異文化理解を深め、しなやかな国際感覚を養います。

マーガレットタイム

豊かな感性を育む「命」の授業です。「自分」「自然」「未来」の3つのテーマを通して、命を学ぶカリキュラムで、観る・聴く・読む・調べる・ふれるの経験を重ね、さらに話す・表現することを通じて、自分自身がいまここにいることの奇跡を実感し、人生を主体的に考える姿勢を培います。



グローバル教育

小学部

毎日受けたい友達がある
毎日会いたい授業がある

現在、小学部は1クラス26～28名の少人数編成で、子ども同士、教師と子どもとの温かなつながりを大切にしながら、一人ひとりていねいに指導をし、「つなぐ手」や「探求の時間」などの特色ある教育を行っています。



生き方を学び独自の教科「つなぐ手」

日本伝統文化、食育、志をもつて活動する人の生き方に触れることで、人としてとても大切な「生きる力」を育んでいます。さまざまなかながりを大切にしながら、人ととの出会いの中で、その考え方や活動に理解を深め、また日本の伝統文化や食育を学ぶことによって、子どもたちの興味の世界が広がっていきます。心やからだで感じた感動や感激は心の糧となり、他者との関わりの中で大きな成長につながっています。

アクティブラーニング
行動力のある子に

「探求の時間」(2020年度試行)へ

これからの中学生たちは、興味関心に基づいて、価値ある活動を見いだし、様々な手段を用いながら、社会とつながり、学びを深めていく必要があります。そんな個人のテーマに基づいて活動する「探求の時間」を小学部の教育課程に位置づけます。



認定こども園 幼稚部

子どもが主役！
自分らしく生きていく力を育む！

幼稚部は、2016年に幼保連携型の認定こども園相模女子大学幼稚部に行し、0歳児から5歳児までの乳幼児に對して教育・保育を行っています。教育目標「健康・表現・自立・創造・協調」を基に、十分に養護の行き届いた環境の中で、子どもたちの主体的な遊びなどの活動を通して、人間関係の形成と心身の調和的な発達を図り、子ども一人ひとりの特性に応じた教育・保育の実現を目指しています。



幼稚部つなぐ手

子どもたちが自分らしく生きていく力を育むことを目標に、自分との繋がりという観点から自分を中心置いて、幼稚部での活動を「自然」「社会」「人」「文

化」の4つの観点より構想し、子どもたちの経験や活動が継続していく中で深化していくように構造化を試みた教育プログラムです。

食育

幼稚部は完全自園給食となり、管理栄養士が立案したバラエティーに富んだ、バランスのとれた温かい給食を提供しています。また、本学管理栄養学科、健康栄養学科や地域とも連携しながら、様々な食育活動を行っています。



インクルーシブ教育・保育

特別な配慮や支援を必要とする子どもたちをはじめ、さまざまな特徴を持つ子どもたちがいることを前提として「共に育つ」ことを意図とし、子ども一人ひとりの教育的・発達的ニーズに対し最適な指導援助を提供していく中で、子ども同士が育ち合う教育・保育を目指します。

ICT教育

デジタルメディアは便利な一方、教育現場で活用する際には、さまざまな工夫や配慮が必要です。これらを避けるのではなくデジタルメディアを幼児教育の中でどのように生かすことができるのかを試行しながら、積極的に取り入れています。

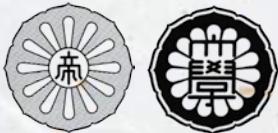
相模女子大学の歌

金田一京助 作詞
高木 東六 作曲

1. さねさし 相模の小野の
学び舎に むつみ合いひつつ
相まなぶ われらが友よ
いざ共に 手に手を取りて
2. いにしへの やまとをみなは
とこしへの こゝろの鑑
新しき 時世の道は
あさゆふの こゝろの撻
3. 天高し われらの希望
かぜ清し われらの操守
たからかに われらは歌ふ
相模女子 大学の歌

金田一京助作詞、高木東六作曲による「相模女子大学の歌」については、学友会の岸田袈裟（旧姓・菊地）らが金田一京助に依頼して、学生たちが率先して行動した熱意に負うところがあつた。1964（昭和39）年11月3日、創立64周年記念式典と併せて催された大学祭において発表されたもので、以来、母校校歌として学生、卒業生に歌い継がれ、歌いづけられている。作詞者の金田一京助は、大学において「国語・国文学」を講じていた時期がある。

校 章



帝国女子専門学校の校章は、1921(大正10)年の秋、帝国女子専門学校の副校長だった野口保興が考案したもので、マーガレットの花を八咫の鏡が囲んでいる。マーガレットの花ことは「希望に満ち溢れる清楚な乙女心」。これに古来女性の魂として大切にされてきた鏡を取り合わせたデザインである。

相模女子大学の校章もこのデザインを引き継いだものであるが、マーガレットの花弁の枚数が12枚から15枚に増えているのが大きな違いである。



学校法人 **相模女子大学**

帝國女子専門學校 日本高等女學校 校歌 静修女學校

葛原 茜 作詞
信時 潔 作曲

1. 大空にゆたけくものぼる日の
勢いみせて榮えゆく日本の誇り
さくら花胸にかざしていそしむや
久遠のゑまひを樂みを
新しき世にみたすべく
使命はたふと少女子われら
2. 健氣にも霜にたへさきほこり
闇にも著き香を添ふる床しき菊を
まねびつ、靜に修めいそしむや
不斷のちからを幸を
海のうちとにみたすべく
使命はたふと少女子われら
3. 帝をばくにばらのみはしらと
尊み慕ひたてまつりこゝろ鏡
みがきては永久にてらすといそしむや
不滅の光をよろこびを
大あめつちにみたすべく
使命はたふと少女子われら

1934（昭和9）年に歌詞の懸賞募集があつたが、入選者はなく、2位が日本高等女学校的泉清三郎氏、3位が翠葉会員の鈴木貞子・大熊つる氏であった。改めて作詞を葛原茜、作曲を信時潔に依頼したものである。歌詞は3番から成り、1番が日本高等女学校、2番が静修女学校、3番が帝国女子専門学校を擬したものであった。